

活動報告③

—教育者・保育者を目指す学生の育成と就職を支援する—

落 合 幸 子

(教職支援センター特定教授)

1 はじめに

令和6年1月に能登半島で起きた地震は、日本中に大きな衝撃をもたらした。折しも、新年早々の4回生保育・教職実践演習授業において、「保育・幼児教育に関する現代的課題の考察と実践」では、私が担当した「保育・教育現場における緊急時の対応」授業で、春には社会人となり、乳幼児保育・教育現場で働く立場になる多くの学生が、自分たちの仕事は子どもたちの命を守る使命があることを痛感し確認し合う場となった。多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を目指し、文部科学省では、令和4年12月に「令和の日本型学校教育を担う教師の養成・採用・研修等の在り方」中央教育審議会の答申が出されている。一方こども家庭庁でも、令和3～6年度までの4か年計画である「新子育て安心プラン」が終了し、待機児童の大幅な減少や少子化を踏まえ、待機児童対策を中心とした保育の「量」の拡大から、地域のニーズに応じた「質」の高い保育の確保・充実へと政策の軸を大きく転換している。

本学においては、昨年度、日本の女子大学として初めてのデータサイエンス学部が開設され、さらに今年度より発達教育学部の教育学専攻、音楽教育学専攻及び児童学科を改組して教育学科が開設された。

子どもたちの教育・保育の分野への就職を目指す学生たちへの支援に携わる仕事も3年目を迎えた。教職支援センターの特定教授の役割について、求められる「質の高い」保育者の養成のために、教職課程の授業と教職支援の活動とバランスの取れた仕事ができるようにという目標は変わらない。課題とその改善に向けて、引き続き特定教授3名と教職カウンセラー・事務職員で連携をしながら進めてきた。

2 昨年度の反省と課題

- 教職支援センターの業務の全体像は掴めてきたものの、職員が担う細かい事務内容などには対応しきれておらず、学生からの窓口対応には不十分なことはやはり多かった。学生に教職支援センターを有効に活用してもらうために、保育・幼児教育への就職を志す学生ももっと利用できるように環境の拡張をさらに進める。
- 今年度は、「教職支援センター会議」は回数こそ少なかったものの、その都度の状況や課題の確認・意見交流を行うことは習慣化した。支援センター事業について早めに計画を立てることは心がけていく。
- 自治体の職員採用試験はその年々によって日程が変わることも多々あり、昨年度の4回生が受験した自治体を中心に、各試験日程を一覧表にし、学生の受験準備や指導に役立たせることは引き続き行っていく。また、受験者から2次試験や3次試験の内容を聞き取りまとめている。
- 幼児教育・保育を学んだ学生のうち、どのくらいの学生が公立園に就職したのか、そのうち独学で合格した人が何人くらいいるのか、また私立園（幼稚園・保育所・認定こども園）や民間施設（養護施設・発達支援施設・障がい者施設等）や企業を選んだ人数等全体像の把握はやはり難しい。
- 授業については課題の出し方やフィードバックの方法、教育・保育実習指導における学生や実習園との関わり方、ポータルやメールを利用した学生との連絡やフォロー等、限られた出勤の範囲で行うことは難しく、細やかでありながら効果的かつ効率的な方法を可能な限り追及しているものの、出勤日以外に行っている時間は多い。

3 昨年度の反省を踏まえた取り組みについて

(1) 幼保就職（保育者）を目指す学生の就職支援

幼保就職を志す学生にとって、教職支援センターは「教員採用選考試験」を目指す学生が利用する場であ

ると捉えている感はやはりある。幼稚園・保育施設、公立園・私立園を問わず支援をしていることをアピールすること、また、その対策方法をもっと浸透させるための取り組みを行っていく。

○教員採用選考試験と異なり、市町村職員採用試験となる自治体の試験は情報の収集が難しい。

- ・今年度は近畿圏以外の東海や四国での受験を目指す「公立園試験対策シリーズ」本の購入を増やしてもらった。実施要項の確認や「専門試験」対策にする。「公務員試験」ではなく、SPI 試験や SCOA 試験を課す自治体が急増している。その勉強を早めに始めるアドバイスをを行った。
- ・昨今は「専門試験」を実施しない自治体が増えているが、実施する自治体の傾向性が掴めてきたので、受験生にはその専門試験対策や傾向を確実に伝えるようにした。
- ・2次試験以降の詳細な試験内容や実施日は1次試験等その都度の合格者のみに直接通知される。今年度も昨年度の4回生が受験した自治体を中心に、進路就職課に届いた自治体の「職員採用試験実施要項」も参考に、学生アンケートや自治体HPを入念に調べて、近畿地方2府6県、東海地方や中国地方、四国地方の一部の県における『自治体採用試験状況（1次～3次・4次試験）』一覧表を作成した。
- ・受験者へのアンケート協力について、昨年度は記載内容や様式を再検討し、後輩学生が知りたい内容をよりわかりやすいアンケートへと変更した。また、特に協力者が少ない幼保受験者にはアンケートへの協力を個別に求める等したが芳しくなかった。全体的にも協力者は減少傾向だった。担当職員の尽力により、Forms で気軽にアクセスし短時間で回答できる方法に変更したことを、教職支援センター利用者に知らせ回答の協力を求めている。昨年度よりも回収が進んでおり引き続き促す。

○幼保就職を目指す学生への試験の流れや対策について、昨年のPDF資料『保育者として就職するために』に加筆し、学科の就職支援担当の教授と共有を行った。

- ・幼稚園、保育施設、認定こども園への就職、公立園と私立園、選び方のポイント、公立幼稚園を目指す時の受験の方法、自治体職員の採用の形、募集と申し込み、試験内容、試験対策等について説明をしている。また私立園を受験する際の試験要項の読み取りのポイントも加えた。

○幼児教育・保育を学ぶ学科の学生の就職支援に繋げるために、試験の受験状況や可否結果を学科の就職支援担当の教員やLSに定期的に伝え連携を積極的に行った。

○昨年度2回生と3回生を対象に行った「教職応援セミナー」の開催の回数や日程の変更を行った。

- ・昨年度も幼保を受験する学生の参加は非常に少なかった。今年度もこのセミナーは私立園を受験する学生にも役立つことをPRし参加を呼び掛けた。

(2) 効果的な教職支援の方法について（大学推薦者への課題も含めて）

○大学推薦者が2次試験を突破しないという実態があることを踏まえ、今年度も大学推薦を受ける学生には、申し込み時と面接時に、教職支援センターへの積極的な活用を促した。大学推薦者は1次試験が免除されるので、早くから2次試験対策に取り組めるはずである。

○教職採用選考試験が全国的に早期化され、3回生での一次試験の実施を行う自治体が増えつつある。4回生時の受験も前年よりも一次試験が早く実施される傾向が進んでいる。そのため早くからの試験対策を促した。

○教職応援セミナーの後のフォローアップ講座でも、2月～3月から定期的に「集団面接」「集団討論」のセミナーを行っているが、幼保の試験も集団面接やグループワークを行う自治体を把握し、学科にポスターを掲示してもらい、既に集団面接を受けることがわかっている学生には参加を促した。その結果3月には第1回目の幼保のテーマでの実施を行うことができた。

○職員体制について、教職カウンセラーは4月～8月は6名中3名（常勤1名）の出勤、9月～1月は1名、2月～3月は2名の出勤である。特定教授は1名は5日間常勤、2名は3日間の勤務である。特定教授は前期は特に多くの授業を抱えており、学生からの予約を教職カウンセラーに代行してもらったり、やむなく断らねばならない状況がある。本来の特定教授の役割が果たせない事態は続いている。

- ・最も忙しい時期に特定教授の時間が不足している、そのため繁忙期だけでも3日勤務の教員をもう一人配置してもらいたいと希望は出している。また、全国の自治体からの訪問者との打ち合わせの部屋や、学生と膝を付き合わせて個人相談を行う専用スペースや個室もないという現在の状況は未だ改善が見られていない。
- ・8月の出勤について、前年度は特定教授と教職カウンセラーの休暇により、十分な指導日を確保することが難しかった。1次試験の結果が7月下旬～8月初旬にわかるこの時期は、教員採用選考試験や幼保の

活動報告③

- 多くの自治体職員採用試験が2次試験前であるため、7月の申し込みを促していたが、8月に入って予約を入れる学生も多い。昨年度の反省を踏まえ、今年度は年度の早いうちから日程調整を行い体制を整えた。
- 対策内容やカウンセラーか特定教授かの指名については、学生からの要請に基づき受けているが、個々の進捗状況や特に強化すべき学生については、カウンセラーと特定教授が、個々の学生の実態について情報共有を行い、指導回数や方向をアドバイスするようにも心掛けている。できるだけ顔を合わせて行うようにしているが、現在カウンセラーと特定教授が別室に配置されているため常々共有し合うには努力を要する。
- 学生相談を受ける学生には全員「相談カルテ」を作成している。この相談カルテに試験日までの「個人面接」「集団面接」「集団討論」「小論文添削」「場面指導」「模擬授業」に関するスケジュールを組むシートを作成し一目瞭然にする。まずは、大学推薦が決まった学生には、該当の学生であることを明記し、順次事前指導を行うという提案については引き続き検討中である。今年度は受験結果の一覧表に逐一記入するようにした。

(3) 教職支援センター会議

表1 教職支援センター会議・打ち合わせ開催表

日時	参加者	内容
6/13(木)	事務局、カウンセラー、特定教授	教職応援セミナー、指導状況の共有、HP更新
9/5(木)	事務局、特定教授	繁忙期の学生指導、採用試験結果
10/17(木)	事務局、カウンセラー、特定教授	フォローアップ講座について
12/3(火)	事務局、カウンセラー、特定教授	来年度に向けて

・議題や日程に応じて、事務局やカウンセラーのメンバーを調整しながら行った。

4 今年度の教職支援活動

(1) 相談利用状況

今年度の相談状況の結果と特徴についてまとめた。

表2 4回生月別相談利用数（採用試験対策）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
実数(人)	1	2	1	8	9	12	9	7	10	6	3	1	69
延数(人)	1	2	1	13	17	20	31	20	12	9	3	1	130

表3 合格者の相談利用回数（10回以上の利用者）

	学生1	学生2	学生3	学生4	学生5	学生6	学生7	学生8
特定教授(回)	23	16	15	7	9	6	7	7
カウンセラー(回)	13	15	7	13	8	11	6	4
合計(回)	36	31	22	20	17	17	13	11
合格結果(箇所)	2	2	1	2	3	1	3	1

- ・4回生の受験自治体は、奈良県（大和郡山市、橿原市、香芝市、桜井市、田原本町）、兵庫県（神戸市）、京都府（京都市、亀岡市）、大阪府（大阪市、吹田市、豊中市、寝屋川市、枚方市、摂津市、茨木市、高槻市）、滋賀県（大津市、守山市、草津市）、愛知県（江南市、名古屋市）、静岡県（湖西市、浜松市、豊橋市）、岡山県（岡山市、倉敷市）、高知県（香南市、安芸市）、東京都（大田区）だった。
- ・教職支援センターを利用し、最終私立園受験者は6名、公立園を受験した学生は17名だった。学科は児童学科の学生がほとんどで、教育学科の学生は1名だった。
- ・自治体の公立園の受験は、4月～7月の春夏に1次試験が始まる自治体と、9月～10月の秋に始まる自治体がある。今年度の4回生はほぼ春夏の受験を目指す学生だった。秋までに就職を決めたい学生の傾向はさらに増えた。
- ・今年度は複数の自治体を受験し複数の合格を勝ち取った学生が何人もいた。本人たちの努力の成果でもあるが、「集団討論」「集団面接」を共に行い切磋琢磨した結果でもあるのではないかと推測する。最終的にどこに就職するかについても相談を受ける場合もあった。本人や家族の意向を優先しながら、気持ちの整理に役立ててもらうように傾聴に努めた。

- ・公立の幼保への就職を目指す学生は教採を目指す学生ほど多くないことや、教職支援センターの利用状況はほぼ把握できることもあり、教職カウンセラーと連携を取りながら、それぞれの専門性を生かした指導を行った。
- ・試験に小論文や作文を課す自治体もあるので、小論文と作文の書き方の差異や過去のテーマについて情報を伝え指導を行った。
- ・自治体受験者からは私立園の併願をどう考えどう行うのか、補欠合格となった学生からは合格の可能性はあるのか、いつまでを目安に待てば良いのか等の相談にアドバイスをを行った。
- ・ディベートを行う自治体が増えたので、今年度は個人指導で行ったが、来年度はグループ指導で対策を行っていききたい。

表 4 3 回生月別進路相談利用数（進路相談）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
3 回生実数（人）		2	1			1	1		3	8

- ・今年度は進路相談を利用したのは3 回生のみだった。来年度はもっと2 回生への学生相談の認知を行っていききたい。
- ・今年度は、教員採用選考試験で幼稚園教諭を志望する学生で、3 回生受験を行い合格した学生が含まれる。
- ・3 回生の進路相談は1 月～3 月に徐々に増える傾向があるので、積極的に進路相談を行っていききたい。
- ・実習での事後指導の際には進路について話を行うようにしている。それがきっかけで進路相談への申し込みにも繋がっている。
- ・今年度は進路就職課の職員との連携も積極的に行い、お互いからの情報交換や学生指導に繋がられた。

(2) 教職応援セミナー

【開催について】 昼休み時間（12:10 ～ 12:40）に実施。申込不要。京女ポータルにてお知らせ。

【準備】 「開催のお知らせ」作成。学生は「教職課程ハンドブック」持参。

【今年度の特徴】 教員採用選考試験が大学3 回生から受けられる自治体が増えてきた現状に対応するために今年度も2 回生・3 回生を対象に実施した。

【講座日程と内容・参加人数】 下記の表のとおり

表 6 教職応援セミナー開催実施状況

回	日程	講座名	講座内容	参加人数
1	7/4 (木)	教員採用選考試験に向けて ～今から準備すべきこと～	・見通しを持つためのスケジュールリング ・エントリーシートの実際	3 回生 5 名・2 回生 15 名 計 20 名
2	7/18 (木)	教職の振り返りと今後の課題 講師：教育学科 村井尚子教授	○教職課程ハンドブック ・振り返りと、リフレクションシート	3 回生 9 名・2 回生 22 名 計 31 名
3	7/25 (木)	教育現場で学ぶこと・学んだこと ～様々な経験を教職への道に～	・振り返り ・今しておきたいこと	3 回生 4 名・2 回生 14 名 計 18 名
4	9/19 (木)	自己分析・自己PRを考える ～自分の良さを伝えるために～	○教育現場での学びから ・自分を知らう（長所・短所、得意・不得意を分析）	3 回生 4 名・2 回生 9 名 計 13 名
5	10/31 (木)	あなたが目指す教師像 (自治体研究も含む)	○あなたが、子どもたちが、保護者が ・理想とする教師とは・信頼される教師とは	3 回生 2 名・2 回生 7 名 計 9 名
6	11/21 (木)	覚えておきたい基本マナー ～教員採用試験に向けて～	○身だしなみ・立ち居振る舞い・言葉遣い等	3 回生 4 名・2 回生 3 名 計 7 名
7	12/10 (火)	面接・集団討論・模擬授業等 ～思いを伝える～	○各々のねらいを理解した思いの伝え方 ○試験で課される模擬授業・実技試験	3 回生 4 名・2 回生 3 名 計 7 名
				3 回生 32 (20) 名・ 2 回生 73 (42) 名 延べ全体合計 105 名 (実数 62 名)

活動報告③

【フォローアップ講座】第4回～7回のセミナー後実施 3 時限：申込制

表 7 フォローアップ講座開催状況

回	セミナー日程	フォローアップ講座日程	講座名	参加人数
4	9/19 (木)	9/24 (火)・11/14 (木)	自己分析・自己PRを考える	2名・1名
5	10/31 (木)	11/6 (水)・12/11 (水)	目指す教師像(自治体研究も含む)	1名・2名
6	11/26 (金)	11/26 (火)	覚えておきたい基本マナー	2名
7	12/20 (金)	12/20 (金)	面接・集団討論	0名

- ・教職応援セミナーは、昨年度各回を2回ずつ実施していたが、今年度は1回ずつの実施とした。
- ・昨年度は、3回生 130 名、2 回生 72 名、計 202 名の参加があったが、今年度は回数を減らしたとは言え、各回参加者が激減した。その理由はセミナーそのものへの学生の関心の薄さや参加のしにくさがあるのではないかと感じる。昨年考察したように動画配信など、今の時代に応じた方法をもっと模索すべきか悩ましい。
- ・参加者名簿から申請している資格の情報をもとに、教職の道への各自の備え等を把握していき、教職支援センターの進路相談を始め利用の参加を呼びかけていきたい。
- ・教職応援セミナー参加者の減少に伴い、やはりフォローアップ講座も参加者が少なかった。セミナー参加者へのフォローに限定せず、実践力が身につく講座であるので、日程や時間帯も含めて参加が増える方法を再考していきたい。次年度からの就職活動を意識し始める年度末から年度初めにかけて、「フォローアップ」の名目ではなく、「教職対策セミナー」として、2 回生向け、3 回生向けに新たな参加者を求めてセミナーを開いてはどうか。進路就職課と時期の調整を行うのも検討してはどうかと思う。

(3) 集団面接・集団討論の実施

集団討論や集団面接を課す自治体の試験対策として、今年度から幼保のテーマに沿った内容で実施することを積極的に行い7回実施した。

- ・集団討論や集団面接を行っている自治体を載せ対策を行うポスターを作成し掲示した。
- ・人数を取りまとめて申し込んでくる学生を中心に、集団討論や集団面接を実施する自治体を受験する学生にも声をかけて参加を促した。参加者の受験自治体は、神戸市・豊中市・吹田市・枚方市・寝屋川市・香芝市・橿原市・守山市・草津市・安芸市だった。
- ・テーマについては事前に伝えて準備をして参加する方法を中心に行った。

表 5 集団面接・集団討論の実施状況

	日時	実施内容	内容・テーマ	参加人数
1	3/29 (金)	集団面接	面接時のマナーと志望理由、自己PR	4名
2	5/29 (水)	集団面接	公務員志望理由、ストレス解消法、関心を持ったニュース、実習で経験したこと	4名
3	6/19 (水)	集団面接	人からの信頼、短所克服、保育者の魅力、安全保育	3名
4	6/21 (金)	集団面接 集団面接	保育者を目指した理由、対人関係での困難、公務員について 保育者に必要な資質、食育で大切なこと	3名 3名
5	7/4 (木)	集団面接	組織の中での自分の存在、相談された経験、今まで頑張ったこと	5名
6	7/10 (水)	集団討論(吹田市)	過去の吹田市の試験に準じた	4名
7	7/19 (金)	集団面接(豊中市)	昨年の豊中市の試験に準じた(場面指導)	4名

5 教職課程科目の授業等における教師・保育者養成の活動

高い資質を持った教員・保育者を養成し社会に送り出すのは大学の重要な使命である。今の学生にとって必要な知識や学びを伝えていきたいと今年度も授業づくりを行った。

①「幼児教育論」

教育学科の学生 13 名が受講。多くの受講生は、幼稚園や小学校教諭の免許取得を目指している。幼児の

発達を踏まえた教師の関わりや就学前教育の基本について学ぶことで、小学校教諭や特別支援教育を志す学生も、乳幼児の発達や幼児教育と学校教育の連続性や接続について理解を深めてもらうことを目標とした。また、保育制度の変遷や社会情勢を学ぶことで、現代の教育現場や子育て支援の課題についての見識や関心をもってもらうことも目指した。選択科目ではあるが、幼稚園実習に行く教育学科の学生には受講してもらいたいと考える。

②「教育実習論（幼稚園実習）」

児童学科の幼稚園実習を行う学生が講義と演習、また教育実習を通して、幼児および保育者について理解を深め、幼稚園教諭に求められる幼児教育の理念と方法、専門的な知識を理論と実践の両面共に習得することを目標としている。4回生に1回、3回生に5回、2回生に2回、計8回実施している。今年度は3名の教員で、3回生での指定幼稚園における教育実習と4回生における自己開拓幼稚園での教育実習の実習前や実習後の指導を行った。また、児童学科の多くの学生は、保育士資格の取得を目指しており、2回生時と3回生時に保育実習も行う。双方の実習により、学生が将来就きたい保育者像を持ち、自身の課題を明確にする指導も大切にした。よく準備をして実習に向かうことは実習に対する基本的な姿勢である。

各学年約100名の学生が、指定幼稚園であれば50園近い私立幼稚園に配当される。全国的に幼稚園（公立・私立・附属等）の割合は約69.7%が私立幼稚園（令和6年度学校基本調査より）であり、それぞれが異なる建学の精神や教育理念を持つ幼稚園で実習する学生にとって、自身の実習園での学びもさることながら、実習後の振り返りをグループワークし、様々な幼稚園の様子や同期の学生の学びを知ることや交流することで学び合いの精神を持つことは大切である。しかしながら年々傾聴の姿勢より、タブレットの画面を見ながらの参加が学生の学びの姿勢になっていることが気になった。そこで、今年度は4回生からの体験談を取り入れた。3名の先輩からの話を聞くことで、自身の4回生での実習に向けてとても参考になったと学生からの感想が多く寄せられた。

③「教育実習論Ⅱ」

教育学科の学生で、幼稚園実習を行う3、4回生4名への授業を担当した。この授業を受け持った3年間のうち最少の人数であった。一昨年度と今年度の4回生の就職状況を見ていると、幼稚園実習を行っても小学校や特別支援学校での就職を目指す傾向が続いており、教育学専攻の学生にはこの傾向が続くと予想された。少人数ということで、ほぼ膝を突き合わせて近い距離で授業を行うこととした。「教育実習論Ⅱ」は母校実習（小学校実習）・幼稚園実習での授業・保育実践力の向上を目指し、教育実習における「授業・保育観察」及び「授業・保育実践」を行う上で必要となる教師としての「資質・能力」の育成をテーマとしており、幼稚園・小学校で実習を行う学生の合同授業を含めた8回の実施である。教育学科の学生は様々な教育現場での実習を経て、幼児教育機関での実習を通して、幼児教育の大切さを実感して将来に活かしてほしい。4月～5月半ばに4回の事前授業、12月に1回の事後授業を担当している。昨年度は授業時間外で行ったが、今年度は授業の一環として附属幼稚園の見学をさせていただいた。

④「保育・教職実践演習」

児童学科の4回生の幼稚園教諭免許及び保育士資格の認定のための必修科目。

- ・保育者に求められる専門的知識及び技術、判断力、対人関係能力、倫理観の形成などについて振り返り、自らの学びを確認し課題を明確化する。
- ・保育・幼児教育に対する使命感・教育的愛情を持ち、子ども理解に基づいた保育内容の指導力、適切な学級運営を行う力等を身に付けることができる。
- ・保育・幼児教育に関する現代的課題について分析し、保育者としての対応を考えることができることを目標としている。

実習における保育・教職の体験をもとにグループディスカッションを行い、自らの学びの振り返りを行った。ゲストスピーカーに幼稚園・保育園の実践の様子について講義していただいているが、保育者としての先輩方の現場でのお話を聞くことができ、熱心に耳を傾ける姿がある。保育に関する現代的課題については4名の教員が2回ずつ実施し、グループワーク・グループディスカッション等により問題を分析するとともに、保育者としての課題解決への取り組みを考える授業を目指している。

⑤「教職実践演習（幼・小）」

教育学科で幼稚園・小学校で教育実習を行った4回生の学生を5クラスに分け、各クラスを2名の教員がオムニバスで授業を行う。15回の授業のうち、合同授業2回とゲストスピーカー講演3回を除き、10回の各教育テーマに応じた授業を行っている。小学校中心の主題名が多いが、幼稚園現場でも小学校現場でも課題意識を持てるように、また特別支援教育に進む学生もあり、それまでの学びから人権教育やインクルーシブ教育の視点を持てるような授業づくりを心掛けた。

グループワーク、ロールプレーイング、フィールドワーク、グループ発表、プレゼンテーション等を取り入れ、様々な実践演習の形で行った。

ゲストスピーカーの講演は、実際の教育現場の取り組み事例を丁寧に教えていただき大きな学びとなっている。「保育者の専門性について」というテーマで、幼稚園の園長先生の招聘を今年度も担当した。今年度は小学校での校長職を経て私立幼稚園での園長をお勤めの方の対面でご講演をしていただいた。5クラス合同ということで、時間帯や教室の調整、公欠者への対応としてビデオ上映を行う対応等も生じたが、幼児教育と小学校教育の連続性やそれぞれの役割の在り方について、ゲストから直接お話を聞くことで、学生の理解が深まったと感じた。

⑥ 教育・保育実習指導（児童学科）

事前指導、訪問または電話による巡回指導、事後指導を実施。実習の前後に、実習に向かう姿勢を確認したり、学生とのコミュニケーションをとることを大切にしている。各自の目標や園への事前訪問での確認内容・注意事項を丁寧に伝えるようにしている。また学生からきちんと報告してくることを大切にしている。事後指導では、進路や次の実習についても繋がるように心掛けている。園からの評価が低かった学生や、教育実習を辞退することにした学生には、特に丁寧に様子や思いを聞き取り、学生の良さや努力を認めながら励ますような面談を行うようにした。

学生への直接指導や関わりを持つ良い機会でもあり、また教育現場・保育施設現場の実情を知り、教職支援に役立たせることができるので大変意義がある。

巡回指導を行うことで、園の実習環境や、一人一人の実習記録を読むことで、実習園においてどの程度の部分実習や責任実習を行わせてもらっているかの大きなデータを念頭におくことで、次年度以降の指導に役立たせるように努めている。

○教育実習指導 指定幼稚園実習…3回生6名(4園)、幼稚園実習…4回生9名(9園)

○保育実習指導 保育実習Ⅰ(指定保育所)…2回生7名(5園)

保育実習Ⅱ・Ⅲ(保育所・保育施設)…3回生9名(8園)

○施設実習指導 保育実習Ⅰ(指定施設)…2回生8名(4施設)

4 今後に向けて

今年度は教職支援の業務3年目ということで、自分の課題や教職支援センターの仕事について、他の特定教授から多くの学びを受けながら、自分なりの意見を述べたり積極的に関われることも増えた。来年度は体制も変わるので、またあらたに人間関係も構築しながら、教職支援センター業務に貢献したい。

各自治体の受験状況を今年度もまとめ、来年度の支援に役立たせたい。試験実施時期や内容も変わりつつあるので、できるだけ最新の情報収集に努める。

授業については、昨年度に改組された「教育学科」の学生が2回生に進級するにあたり、新2回生のカリキュラムにも携わっていくことになっている。新たなシラバスの作成も学科の教員の方々と調整を行いながら授業作りをしていく。新旧両方の授業内容に併せて、課題の出し方やフィードバックの方法、教育・保育実習指導における学生や実習園との関わり方、ポータルやメールを利用した学生との連絡やフォロー等、限られた出勤の範囲で行うことはやはり厳しいが、効果的かつ効率的な方法を次年度も可能な限り追及していきたい。